

留学・研究計画書

氏名 渡邊 暁子	留学機関名 フィリピン大学第三世界研究所
留学先国名 フィリピン	留学期間 西暦 2005年4月～2007年3月
研究テーマ (留学目的) マニラのムスリム・コミュニティにみるアイデンティティの動態	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>本研究の目的は、マニラ首都圏のひとつのムスリム・コミュニティを事例研究として、そこで生活する人々とその家族を主たる対象に、宗教活動、生業活動、教育、家族・親族関係、コミュニティ内外のネットワークなどの分析を通して、彼らのアイデンティティの動態を実証的に考察することである。</p> <p>1970年代の南部フィリピンにおける紛争を契機に、フィリピン・ムスリムの生活域は南部からマニラへと拡大した。それによって、首都に移り住んだムスリムは、圧倒的なキリスト教徒主流社会の只中でマイノリティとして日常生活を送り、その一方で多様なムスリム民族集団のなかで生活することが常態となった。他方、1980年代以降、正統イスラームの中心とされる中東ムスリム諸国、特にサウジアラビアへの出稼ぎ労働者が急増してきている。このような状況において、マニラのムスリム・コミュニティに住む人々は、自らのアイデンティティをどこに位置付けようとしているのか、そしてマニラで生まれ・育つ子供たちはどのようなアイデンティティを形成しつつあるのか。1980年代に集中して発表されたマニラのムスリム研究では、マニラ・ムスリムのアイデンティティを宗教的・民族的に所与のものとして扱う傾向にあり、それもムスリム成人男性を主たる研究対象としている。申請者も博士予備論文において、ムスリム・コミュニティがマニラに形成・展開した過程をフィリピン政治、マニラの発展、中東への出稼ぎの増大、中東を中心とする世界的イスラーム化の動きと結びつけて考察したものの、コミュニティレベルでは、男性の移動と生業の変遷のみに焦点をあて、同じコミュニティ成員である女性や子供を等閑視してきた。そこで、本研究は、マニラのムスリム家族を主要な研究対象として、夫婦間、親子間に見るアイデンティティの動態を、故地や出稼ぎ地との関係をも踏まえて考察しようとする。</p> <p>調査事例として選定するコミュニティは、現在6300人ほどの人口規模でマラナオ人、タウスグ人、マギンダナオ人と多様なエスニック集団のムスリムが混住する。成員の多くは小売業、露天商、海外出稼ぎ労働者、出稼ぎ斡旋業、警備員など多岐にわたる。公立学校はすべてコミュニティの外にある。</p> <p>予備調査として2003年12月から2004年3月にかけて全1317世帯中150世帯のサンプル調査を実施し、属性、世帯主夫婦それぞれの「実家」の家族構成および居住地、生業、マニラ滞在年数などを分析した。その結果、①多くの家族が故郷、マニラ、南部フィリピン外の土地、外国などで分散居住をしている、②マニラで青年期を迎えた者のなかでは、民族間結婚、宗教間結婚が増大しつつある、③マニラで高等教育を受ける子供の割合が故郷における割合に対して比較的高いといった、いくつかの特徴が浮かび上がってきた。本研究では、この150世帯のなかから、生業、マニラ滞在年数、「実家」の家族構成と成員の居住地によって対象者を選定し、調査を行う。具体的には、同郷組織やアラビア語学校など対象コミュニティにおいて、アイデンティティ形成に影響を与える事象、国内外のNGOや政府・地方自治体の福祉などコミュニティの外部からのサービスを明らかにしたうえで、調査対象者に関する社会経済的ネットワークを、世代ごとのアイデンティティの動態と関連させて考察する。なお、このときジェンダーによる考察も行い、男女のアイデンティティにいられる異同とその背景を検証する。</p>	

氏名：渡邊暁子

所属：京都大学大学院

留学先国：フィリピン

留学先機関：フィリピン大学 第三世界研究所

留学期間：2005年9月～2007年5月

【研究テーマ】

婚姻・移動・生業をめぐるマニラ・ムスリムの社会経済関係

【成果報告】

1 研究の背景と目的

フィリピン国民の圧倒的多数はキリスト教徒であり、島嶼国家の中心は首都マニラが位置する北部フィリピンのルソン島にある。他方、全人口の約5～10%を占めるムスリムは13の民族言語集団から成り、それぞれ南部フィリピンのミンダナオ島やスルー諸島などに居住している。1960年代末に始まったムスリムの分離・独立運動を契機に南部フィリピンにおいて紛争が引き起こされた。その結果、ムスリム人口が国内外に拡散し、マニラ首都圏に多くのムスリム・コミュニティが形成された。現在約12万人いるとされるマニラのムスリム人口は、見知らぬ人たちと隣り合わせに暮らしながら生活を営んでいる。

このような状況に対して、従来のフィリピン・ムスリム研究は南部フィリピンを対象地とし、主に分離・独立運動や民族誌的・人類学的側面に重点が置かれてきた。マニラのムスリムにかんする研究は1980年代にいくつか発表されただけであるが、それらはマニラへの移動後の人々の動きを静的なものとしてとらえる傾向にあった。これらの研究では、コミュニティ内部での人々の多様な生活実践については等閑視されている。

そこで、本研究はマニラ首都圏のひとつのムスリム・コミュニティを事例研究として、そこで生活する人々とその家族を主たる対象に、生業活動、教育、家族・親族関係、コミュニティ内外のネットワークなどの分析を通して、彼らの多様な社会経済関係の動態を実証的に考察することを目的とする。本報告では、データ整理の進展の都合から、このうち、マニラで結婚した世帯、すなわち独身かつ青少年期にマニラにやってきて結婚にいたった人々をとりあげて、婚姻と移動と生業が連関する社会経済的関係を探っていく。なお、ここで使用するデータは、調査地における世帯調査をもとにしている。

2 調査地の概要

本研究の調査対象地 SMC は、マニラの3大ムスリム・コミュニティのひとつである。4.9ヘクタールの土地に人口1万人ほどのムスリムが住んでおり、人々の民族言語的属性は多数派であるマラナオ、マギンダナオ、タウスグ、ならびに少数派のイラヌン、サマ、ヤカン、そしてイスラーム改宗者である。

3 婚姻にみるフィリピンのムスリム社会の動態

1) マニラにおけるムスリムの婚姻実践の今日的状況

2006年に、SMCの一部において480戸(1,992人)の世帯調査を行った。有効回答世帯は452戸である。このうち、マニラで結婚した世帯は189件あった。これらの世帯主が結婚した時期をI期：1990年以前(29世帯)、II期：1991年から95年(25世帯)、III期：96年から2000年(43世帯)、IV期：2001年以後(92世帯)の4つの時代に区分して分析すると、次の点があきらかとなった。つまり、以前はキリスト教徒との通婚が多かったが、次第にムスリム同士の婚姻が増えていったということである。I期に結婚した世帯の55%(16世帯)がキリスト教徒との通婚であったことは、ムスリム女性の人口が少なかった時代、カトリック教徒が圧倒的多数派を占めるマニラにおいてキリスト教徒の女性を配偶者として選ぶ方がより容易であったと考えられる。また社会経済的には、キリスト教徒の女性と結婚することは、郷里でムスリム女性に高い婚資を支払うという慣習にしたがって結婚することよりもはるかに安く済むことであるし、キリスト教徒配偶者側のネットワークに自身を組み込ませることもできた。この異教徒との結婚の割合は、時代を追うごとに下がっていくが、これに反して割合が増加したのは、ムスリム同士の婚姻である。これには、同民族言語集団間の婚姻と、異民族言語集団間の婚姻の2つがあるが、I~IV期を通じて最も多いのは同民族言語集団の婚姻の方であり、49%にまで達した。このことは、近年マニラにより多くの独身のムスリム女性が滞在していることを物語っている。

では、マニラに独身のムスリム女性が多く到来していること、そして彼女たちがここで結婚していること背景は何であろうか。このことは、マニラにやってくるムスリム女性の移動理由を分析することが手掛かりとなる。マニラで結婚した189世帯の妻の移動理由を分析すると、「海外出稼ぎ労働に行くため」と「出稼ぎ労働から戻ってきた」の2者を合わせ、36%(73人)の移動理由は海外出稼ぎ労働と関連する。海外での出稼ぎ労働のための手続きは煩雑で、近年では半年に及ぶ。この期間に彼女たちは異性と恋におちる。それは郷里の家族と離れたことによる精神的な不安や、社会的・経済的保護を求めるためであることが多い。このような状況下で、彼女たちはしばしば宗教上の逸脱行為を行い、ときには婚前妊娠に至る。郷里において近隣住民の噂から家族や親族の名誉を守るためにも女性たちはマニラで結婚するのである。

伝統的に、フィリピン・ムスリムの婚姻は、双方の両親によって取り決められてきた。しかし、この慣習は徐々に消えつつあるように思われる。郷里のミンダナオで結婚した252世帯のデータと比べると、マニラの方が求愛期間を得て結婚した例が多い。またミンダナオにおいても、II期以降、両親の取り決めによる結婚の数は減少している。このことについて、1983年にマニラに移住したタウスグ女性は次のように語る。「以前は、子供たちが両親の言うことを聞いてきた。しかし、いまはその逆で、両親が子供たちの言うことを聞いている。」両親は、子供たちが駆け落ちをして悪いうわさを立てられるのを避けるために、

彼らの恋愛を認めざるを得ない。これは、マギンダナオとタウスグの家族に多い。一方マラナオはこの2つの民族言語集団とは異なる状態にあり、IV期には、この集団における双方の両親の取り決めによる婚姻が急増していた。この現象はマニラにおける親戚の存在の有無と相関関係にあり、次節ではこの親族関係と婚姻についてみていきたい。

2) 親族関係と婚姻：ワリと証人

婚姻は、当事者だけの問題ではなく、家族や親戚をも巻き込むものである。とくに、イスラームでは、求婚から挙式までの諸手続きに様々な人員が介在する。イスラームの方法にのっとして男性が求婚するとき、女性に対して直接結婚を申し込むことはしない。男性側の代表者が、女性側の代表者に対して結婚を申し出るのである。女性側の代表者は、おおむね当該女性の両親である。男性側の結婚の意志を伝えるために、相手側の代表者に指輪が渡される。そうして初めて、両者がそれぞれの家族の事情について話し合い、婚資の額の交渉が行われる。数度の訪問の後、男性側から女性側へと婚資が渡されるか、後日渡すという契約を交わす。これと同時に、女性側の代表者のなかから女性の父親やオジといったワリ (*wali*) という保証人が女性の結婚を認める意思を示す。

これら一連のプロセスにおいて、両者の代表者が顔を付き合わせる事が重要だとされているが、女性のワリがマニラに滞在している場合、男性側は女性の郷里に赴いて女性の両親に直接求婚を行わなくてもよいと推測される。このことは、127件(67%)がマニラのワリから結婚の許可を与えられたことから裏付けられる。しかし、例外もあり、17件(9%)が男性自身ないしは男性側の代表者が女性の郷里に赴き、女性の両親に求婚している。1994年にイラヌン女性と結婚したタウスグ男性は、交通費を賄えなかったため、電話で郷里に住む女性の両親から結婚の許可を取り付けた。2001年に同じ民族言語集団の女性と結婚したマギンダナオ男性は、同コミュニティに住む女性の祖父の家で結婚式を挙げた。「交通費の負担が大きかったから、マニラで式を挙げる事が私の両親のリクエストだった」と彼は言う。通常、結婚式にかかる費用は男性側が負担するものであった。しかし、郷里に住む女性側の両親は納得せず、両者がマニラで結婚した後、女性を両親の元へと連れて行くことが決まった。新婚夫婦がミンダナオに赴き、男性が妻の両親に婚資を渡したことで一連の求婚手続きが完了した。また、ワリを通さずに結婚した件数は35件にのぼる。このうち、18件はキリスト教徒女性との婚姻である。他方、「自分自身で事を決める年齢に達している」としてワリから認可を求めなかったムスリム女性が10人いた。これらの女性の多くは再婚である。一般に、再婚する場合、女性は保証人を立てなくてもよいとみなされている。

ワリと同様に婚姻において重要な役割を果たすのが、2人以上の証人の存在である。世帯調査から、マニラでの婚姻の増加は、マニラに住む親族数の増加とも比例していることがわかった。証人に期待されていることは、両者間の社会的絆を補強することだけでない。彼らには、結婚式の資金提供者となったり、将来、必要に迫られたときに助けを請うこと

ができたりすることが期待されている。証人らの役目は、フィリピン社会の多数派であるキリスト教徒の婚姻における、教父（ニノン）と教母（ニナン）と類似する。そこでは、これらの教父母が新婚夫婦のセーフティネットとなることが求められている。証人が「他人」と答えた 8 件のうち 6 件は、証人が新郎の職場と関係する人物であった。これらの証人となる人物は、裕福であるか、それぞれの職場において影響力を持っている者が好まれる。2000 年に結婚したタウスグ女性の相手は警察官のマギンダオ男性であった。2 人の結婚式はホテルで執り行われたが、夫側の証人は警察部長らであり、他の招待客は彼の同僚ばかりであったと語る。もし、結婚式をコミュニティ内で執り行うのであれば、当事者の民族言語集団の会長が証人となることが多い。このとき、夫婦は、民族言語集団の会長から認められることで、保護と便宜を図ってもらうことを期待している。1992 年にキリスト教徒女性と結婚したヤカン男性は、結婚式の証人に、コミュニティ内のヤカン集団の会長にお願いした。後に、公務員でもあった会長のつてによって、この男性は上院議員の護衛という職を得ることができた。

4 婚姻にまつわる金銭の流れと各民族の職業分化

1) 婚資の出所とその形態

マニラで結婚した 189 世帯のうち、夫本人からの婚資が拠出されたのが 75 件（40%）、夫の両親からののが 40 件（21%）、夫のキョウダイからというのが 15 件であった。また、親戚から援助を得たのが 22 件である。一方、婚資が渡されなかった 8 件の内、6 件が異宗教徒間の結婚である。すべてムスリム男性とキリスト教徒女性とのカップルである。これは、ムスリム男性が、仮に相手が婚姻契約時にイスラームへと改宗してもキリスト教徒女性の家族には婚資を渡さなくてもよいと考えているためである。

婚資の出所は郷里において異なっており、夫は自身の家族の成員に対してマニラと比べて依存度が高い。または両親が息子の婚資を拠出するのが自分たちの務めだと考えている。このことは、郷里で結婚した 226 件のうち、30 件（13%）のみが新郎自身が婚資を出している一方で、112 件（50%）が両親から出されていることからもうかがえる。さらに、親戚が婚資の援助をしたのが 51 件（23%）と、マニラでの割合の 2 倍近くになっており、郷里での婚姻が親戚一同を巻き込んでいることを示している。以上のように、結婚を行う場所の比較を行うことによって、マニラで結婚したカップルの方が、結婚時に夫側の両親に金銭的に頼っていないことがうかがえた。そのうえ、夫側の親戚は新郎に対してあまり援助の手を差し伸べない。これも、「ここ（マニラ）での生活は個人ベースだ」といわれるゆえんである。自身で婚資を拠出した男性の多くは、警察官といった定職についている公務員や、会社からローンを借りることができる長期勤務実績のある警備員、あるいは、海外出稼ぎ労働から帰ってきたばかりの者である。

マニラでの収入源はおもに現金であるため、近年、婚資は現金の形をとることが一般的となっている。従来、婚資は現金、畑地などの不動産、および台所用品や家具といった家

財道具という形態をとっていた。しかしながら、マニラのムスリム社会では土地所有権を受け取ることすら難しい。彼らは、マニラや海外で働くための資金を得るために、郷里で所有していた土地を担保にすることが多かったが、たいていは結局返済できずに土地権の喪失にいたる。その一方で、マニラで育ったムスリムの間では、農業の手法を知らないので、畑地をもらうよりかは現金でもらう方がよいとする人もいる。このため、婚資の形態が合理化されることによって、新婚夫婦は郷里で新生活を始めたり運試しをしたりする機会さえも与えられなくなっている。

2) 婚資の額と設定方法

婚資は、おおむね女性側と男性側の代表者との間の交渉によって決まる。対象コミュニティにおいては、民族組織の長老数名が交渉人の役目を担うことがしばしば見られる。

婚資の額は、民族言語集団によってばらつきがあり、マラナオでは 50,000 ペソ以上の件数が多く、マギンダナオは 10,000～49,999 ペソに集中している。また、タウスグは、10,000～49,999 ペソと 100,000 ペソ以上に二分されている。この額は、女性の家系、学歴、職業、容姿などが判断基準となる。また初婚か再婚かで大きな差がある。マギンダナオの例をみてみよう。マギンダナオの民族長が言うには、調査地におけるマギンダナオ女性の相場は次のようになっている。大卒：30,000 ペソ、高卒：15,000 ペソ、小卒：10,000 ペソ、それ以下：5,000 ペソ。これに貴族の血を引いていれば 50,000 ペソ、公務員であれば 20,000 ペソ、海外出稼ぎ労働を経験していれば 10,000 ペソそれぞれ加算される。このように、民族言語集団によってばらつきがあるものの、全体としてみると、マニラで結婚した世帯の方が、郷里で結婚した世帯よりも婚資の額が少ないことがわかった。両者の最大の違いは、親戚の数と訪問客の人数の差である。

3) 婚資の使用先

クルアーン第 4 章 4 節に「そして（結婚にさいしては）女にマハルを贈り物としてあたえなさい」（括弧内は引用者）と書かれていることから、婚資は花嫁自身に与えられるべきものであると Pandapatan は主張する [Pandapatan 1983:9]。かつてミンダナオでは、婚資の一部の現金は、花嫁側の親戚などで分配されていた。しかし、このことは変化している。タウスグやサマ、ヤカンといったスルー諸島に周辺に居住していた集団が婚資を結婚式の宴会に使い、残りを親戚同士で分け合っていたものの、その一方で、ミンダナオ本土に居住するマラナオやマギンダナオは、婚資のいくばくか（たいていは半分）を花嫁に渡し、それを新しく生計を営むうえでの資金に充てている。また、マギンダナオとイラヌンだけが、婚資の一部を海外に出稼ぎに行くための手続き費用に充てている。

この違いは、第 1 に民族言語集団ごとの婚資に対する認識の違いに表れている。マラナオは「花嫁の出自に対する敬意の表明」とする一方で、タウスグは「彼女の家族における女性の喪失に対する補償」としている [Gowing 1979:75]。「婚資はだれが利用したのか」

という私の質問に対し、1999年にタウスグ男性と結婚したタウスグ女性は「もちろん、両親よ。両親が私を育ててくれたのだから、私が一部を受け取るなんて恥ずかしくてできない」と答え、2002年にマラナオ男性と結婚したマラナオ女性は「花嫁の生業に婚資の一部が使われるのは現代の風習（modern custom）よ。伝統的には、花嫁の両親がそれを受け取っていたから」と言った。彼女は、自分に与えられた婚資の一部を近くのショッピング・モール内の仮設店舗を借りる資金にした。2005年にマラナオとマギンダナオのハーフの女性を妻にしたイラヌン男性は、婚資は「投資のようなもの」とみなしている。というのも、彼は妻の両親から新生活を始めるために、渡した婚資の一部が戻ってくるのを知っていたからである。第2の理由は、次で示すように、職業と深く関連している。

4) 婚資と職業

マニラで結婚した189世帯のうち70件がなんらかの形の「商売」に携っており、このうちの51%がマラナオによって占められていた。彼らの商売の展開パターンは次のようである。まず、行商から初め、次に道端でビニールシートを広げたり、木製の台を置いたりして商品を売る露天商となり、さらに市場での仮設店舗を月極めで借り、最終的にはショッピング・モールの仮設店舗で経営をする。このため、妻の両親から新婚夫婦に与えられる婚資の一部は、生業規模を大きくするために大いに役立つ。夫が行商人だった場合、婚資は商品を買うのに使われ、露天商だったら、店舗の賃貸料にあてがわれ、それよりよい生業環境にある場合は、市場のテナントからショッピング・モールのテナントへと変身する。一方、タウスグとマギンダナオの社会では、婚資は結婚式の宴会に使われたり、親戚の間で分けられたりするため、新婚夫婦の職業選択は、海外にある。このため、彼らは出稼ぎを繰り返し、このうちには周旋人となる者もいる。しかしながら、出稼ぎをするために独身でマニラに来た者のなかには、本来の目的を果たせずに結婚する者もいる。また、新郎が公務員であった場合、婚資の一部が新婚夫婦に渡されないことが多い。婚資の一部は新婚夫婦に対する「援助」としての色合いも帯びているため、安定した収入を得たりローンを組んだり、または将来年金を受け取ったりすることができる公務員には必要でないとみなされるのである。このように、新婚夫婦の職業が何であるかによって、婚資の一部の使われ方が異なっている。そして、これがおおむね各民族言語集団の職業の住み分けにつながっているのである。

5. ムスリム社会の変容と「プラクティカル」

フィリピン・ムスリムの挙式する場所が郷里に加え、「マニラ」や「出稼ぎ先」といったものが登場したことの背景には、生活スタイルの変化があった。ここでは、それにともなったフィリピン・ムスリムの世界観の変化について考えてみたい。

15歳以上も年の離れた元キリスト教徒警察官（結婚と同時にムスリムへと改宗）と結婚したイラヌン女性 R は次のように言う。「いま、私たちは『プラクティカル』に生きない

とだめ。旦那はちょっと年寄り。でも、同年でも暴力を振るうムスリムの夫がいるよりも、落ち着いた気質の人と結婚する方がいい。」ミンダナオにおいて、従来、ムスリム男性と非ムスリム女性との結婚は許されていたものの、ムスリム女性の非ムスリム男性との結婚はタブー視されていた。結婚したらその社会から追放されることもあったほどだ。近年では、婚姻と同時に男性がムスリムへと改宗すれば一応問題はなくなってきたが、依然として男性と新婦側の親戚との間に確執は残り、周囲が妬みの言葉をささやく。このような批判やうわさに対して、事項を正当化させるためだろうか、Rは「自分たちは『プラクティカルに判断』したうえで彼との結婚に踏み切った」という。

このような場面において、「プラクティカル」という言葉はミンダナオの文化や伝統とは切り離された現実的選択のうえでの行為を意味する。婚姻にかんしては、Rの事例だけではなく、商売の資金にするため婚資の一部を充てることや、妻側の両親の要望に応えるまで独身でありつづけるよりも後払いの誓約書を作成することや、何よりも少ない経費のためにマニラでの挙式を選ぶことも含まれているであろう。これらの行為の背景には、マニラの社会的状況が親戚で溢れた郷里の状況にくらべて規制がゆるいのも挙げられる。ここでは、アダットは強制力をあまり持たない。しかしながら、その一方でムスリムはイスラームにかなった手段を模索している。「プラクティカル」な生き方は、マニラという新天地において郷里の文化や伝統と妥協したり交渉したりしながらも、基本的にはイスラームに従ったマニラ・ムスリムの生き方ではないだろうか。

今後、聞き取りデータの整理と分析を進めて博士論文を執筆していくうえで、この『プラクティカル』という言葉が都市に生きるムスリムの行動原理や世界観・アイデンティティに対してどれほど適用できるかを探っていく、ひいてはマニラの非ムスリム人口の行動原理に対するの普遍化の可能性も模索していきたいと考えている。

【留学全般の感想】

2005年9月から2007年5月までの21ヶ月間、私はフィリピン大学第三世界研究所の客員研究員として研究に打ち込むことができました。普段は調査地と研究所のどちらかで過ごしていました。調査地では、近所の人たちとの世間話から、少ししかしこまった聞き取り、または集中的に世帯調査を行いました。ときには、無料医療サービス、物資の寄付、政治的キャンペーンといった行事を見に中央広場へ行ったり、あるいは結婚式があるのを知って手伝いに行ったり、カメラマン役を買って出たりしていました。

調査地からジブニー（乗り合いジープ）1本で行くことができる研究所では、大学図書館に行って関連資料を入手したり、フィールドノートをまとめたりする作業を通じて、研究内容を再考する時間をとることができました。また、大学という学術機関の長所は学者が近くにいるということです。気になったことや新たな方向を探る際に、これらの先生を訪ね、議論を行うことができました。さらに、2度ほど大学の特別授業を行う機会があり、マニラのムスリムや東南アジアのイスラームについての話をすると、生徒たちは思い思い

の質問をぶつけてきてくれました。これも、研究の視野を広げるきっかけとなりました。

しかしながら、研究一辺倒の生活を毎日過ごしていたわけではありません。研究所の友人と飲みに行ったり、郊外の避暑地にも遊びに行ったりすることもありました。とりわけ、調査地の外に住むムスリムの友人とその一家とは縁があったのか、家族同然の扱いを受けるようになり、彼女らの家でしばしばくつろぐなど、気の置けない間柄となりました。

ところで、マニラのような都市で研究を行うメリットは、24時間電気が使えるということでした。持っていった小型のノートパソコンやICレコーダー、カメラが非常によく役立ちました。大学や家で、フィールドノートに書き留めた内容をその日のうちに清書してパソコンに入力したり、パソコンで日記をつけたりしていました（もちろん定期的にバックアップやプリントアウトをしていました）。これらによって、留学中に異なるテーマでの2度、学会発表を行うことができました。また帰国して2ヶ月も経たないいま、投稿論文を英語で2本、日本語で1本すでに提出することができ、現在のデータ整理の作業を数倍早くさせてくれています。

振り返ると、このおよそ2年間、私は非常に恵まれた環境にあったと思います。松下アジア・スカラシップのおかげで心にゆとりを持った留學生活を送ることができ、喜怒哀樂のすべてを周りの人々と共有しました。いろいろな悪評があるものの、調査地では多くの人に親切にいただきました。外から帰ってきて調査地の家に戻る際、「やあ」と手を挙げたり、アイコンタクトをしたり、世間話に花を咲かせられるような関係が広がったのは、留学してから1年以上が経ってからのことです。帰国するのが惜しいくらいでしたが、最後、やむを得ない事情で日本に戻ることにになりました。しかし、留学期間ずっと住み込みをさせてもらった家の「Ante」を初めとする家族の方々にはいくら感謝してもし尽くせません。この経験と関係を一過性のものにせず、これからも研究を続け、発表をして、フィリピンを再訪し、持続的に双方の社会に還元していくことを考えています。そして、最後になりますが、留学を通して温かくサポートしてくださいました松下国際財団の皆様にご心よりお礼申し上げます。

引用文献

Gowing, Peter Gordon. 1979. *Muslim Filipinos: Heritage and Horizon*. New Day Publisher. Quezon City: Philippines.

Pandapatan, Khaironisha Inarawan A. 1985. Professional Maranaos' Perceptions on Mahr (Dowry). Unpublished M.A. Thesis. Quezon City: University of the Philippines.